

## 〈図書紹介〉

韓<sup>コ</sup> 準<sup>ジュン</sup> 石<sup>ソク</sup> 著

『文の文化と武の文化―隣の国の同と異―』

(有斐閣、一九八九年)

梅 田 徹

オリンピック開催や経済発展で、最近、韓国が注目を浴びるようになったが、果たしてわれわれ日本人は、日韓の歴史についてどれだけ正確な知識をもっているのだろうか。日本にとって、韓国は「近くて遠い国」と言われるが、どれくらい「遠い」のであろうか。駐日公使を務められたことのある著者の鋭い識見になる本書は、その「距離」が相当のものであることを教えてくれる。日本と韓国（韓半島に勃興した国々の総称としての韓国）の歴史に対するわれわれ日本人の目を開かせ、ありうべき日韓関係について、実に多くの示唆を与えてくれる。

## 図書紹介

以下に内容を紹介します。まず全体の目次は次の通りで

ある。

### 第一章 表れた「同」と「異」

- 1 「同」について
- 2 「異」とその基因―地理的条件

### 第二章 日韓両国の近代化に差をつけた武と文の文化

- 1 日本の「武」の文化
- 2 韓国の「文」の文化

### 第三章 日本の「武」の文化とその功過

- 1 武士文化と近代化の明暗
- 2 経済至上主義の成功
- 3 経済最強国の明暗

### 第四章 韓国の「文」の文化の受難

- 1 儒教体制の限界
- 2 明成皇后とその死―自主近代化の終焉
- 3 植民地政治がもたらしたもの

### 第五章 武の文化の取入れと韓国の発展

- 1 解放と南北分断
- 2 段階別経済発展とその背景―テッドロツクをいかに脱け出したか

- 第六章 日韓両国の無知と過ち
- 1 既成の相手国観
  - 2 歪んだ歴史記述
  - 3 韓日の経済関係

第七章 歴史教科書―わだかまりの根源

- 1 韓国高校教科書の日本関係記述
- 2 日本の歴史教科書の対韓記述
- 3 古代史通念の魔力
- 4 日本の通念と異なる新しい歴史解釈の息吹

第八章 日韓双方の最近の変化を読む

- 1 韓国における最近の変化
- 2 日本における変化
- 3 両国の国際環境の変化

第九章 東アジアの平和と繁栄の条件

- 1 経済大国のゆとりを生かして
- 2 関心のおきどころを変える
- 3 東洋の親善協力に寄せる詩

日本と韓国の間には、驚くほど似かよった点があるが、大きく違う点も多い。第一章「表れた『同』と『異』」では、著者は、日韓の「異」「同」を形成した基本的要因は何かという問題意識から出発する。それは広い意味での地理的条件に求めることができるという。気候が似ている、言葉が近い、古代から血のつながりがあるなどの「同」は、地理的に近接していることに因るものである。

文化移動には障害とならなかったが、大軍の移動には大障害となったのが、両国間に横たわる海峡であり、それだけの地政学的差異を規定している。日本は、海峡によって大陸と隔てられた島国であるがゆえに、強大な軍勢力をもつ大陸系の隣国に侵されることがなかった。これに対し、韓国は大陸つづきであるがゆえに、しばしば中国の大軍に對抗せざるをえなかった。日本列島と韓半島の文化の差、すなわち日韓の「異」は、この地政学的差異を合わせた風土の差によってつくられたのだという。

第二章は「日韓両国の近代化に差をつけた武と文の文化」として、日韓それぞれの「かくれた形の文化」の特徴を、日本は「武」の文化、韓国は「文」の文化という対比で描き、これが近代化の早晩に大きく影響したと見る。

江戸時代における藩相互の対立、幕府の「目付」、藩内部の階級制度的統制などの緊張対立の継続が、日本の武の文化の基盤であった。そして、この基盤の中で「まとまりの強さ」「実質尊重」「徹底性」が伝統的文化として定着していき、「日本の合理主義」が培われた。日本が他の東洋諸国と違った速やかな近代化に成功することができたのは、こうした基本的な条件が存在していたからであると説く。明治維新のときには、すでに人々の間に合理的に物事をとらえ、行動する訓練ができていたというのである。

一方、韓国においては、十五世紀中葉以降、儒教的士大夫の文治の世が続き、その影響が支配的となって、「文」の文化が定着した。「文」の文化の中では、「単価値至上化」「学識尊重」「自然自由好み」という基底文化が培われた。「単価値至上化」は複眼的なものの方を妨げ、「学識尊重」は客観的、数量的正確性の要求される「物」の世界の知識ではなく、人文的世界の知識であったために、西欧の合理主義の発達につながらず、物の生産に結び付かなかったという。

第三章では、「日本の『武』の文化とその功過」が述べられる。明治維新後の短期間に富国強兵に成功した日本は、

一方でその「徹底性」ゆえに、戦争への道をひた走り、敗戦に終わった。戦後の日本は「富国オンリー」の道を進み、まれにみる経済発展を遂げたが、それができたのは、その背景に「モア・アンド・モア」にひた走る国民の特性があり、「まとまりの強さ」「徹底性」があったからであった。そして世界一の経済大国になつたいまでも、政府も民間もひたすら「より強く」の一本筋になっていると、著者の目には映る。経済大国を築きあげた気質の中に、危険性が宿っている。経済大国を守り通そうとするまさにその不変の徹底性ゆえに、不吉な方向に発展する可能性が現存する」と警告する。

第四章は「韓国の『文』の文化の受難」を描く。李朝鮮国も、日本と同様に鎖国政策を採っていたが、その「文」の文化ゆえに厳しい国際環境に的確に対処できなかつた。利用厚生を図ろうとした「実学派」が政治の場で主流とならなかつたことに加え、明治維新によって近代化の道を歩み始めた日本が強圧的に開国を迫つたために、自主的に近代化を進める時間的余裕を奪われた。

さらに、日本人官吏による明成皇后の暗殺は、韓国の近代化を決定的に遅らせるべきことであつた。通説に対抗し

て著者は、明成皇后は近代化に積極的であったと力説する。日本は、韓国を植民地化するのに障害であったからこそ、国際的非難を覚悟してまで皇后暗殺という暴挙に出たのだという。そして一九〇五年の保護条約以来四〇年にわたる自主国家管理能力の断絶が、韓国社会に最も大きな打撃を与えた。その後遺症は独立後にも残った。

第五章「武の文化の取入れと韓国の発展」では、日本から解放後の韓国社会の発展について、各時期における、主に経済発展と関わりの深い特徴が手ぎわよく述べられている。生活必需品の経済であった五〇年代を経て、六〇年代には、朴大統領の軍事政権の下で、「文」の文化に、「武」の文化の取入れが始まり、職場における管理統制が導入され、工業発展の不可欠の先行条件となった。

七〇年代の危機の再来と克服の時代を経て、八〇年代の韓国経済はテイクオフと体制定着の陣痛を特徴としているという。さらに著者は、現代の韓国社会に起こりつつある「三重変革」に言及する。それは、①儒教的伝統と植民地体制から自由民主主義へ、②個別労働から組織労働へ、③急速な大資本の膨張という変革である。この三重変革こそ韓国事情を理解するカギであるという。第三世界の経済発展

を解析するさいに参考となる視点である。

第六章「日韓両国の無知と過ち」では、日韓両国の国民は互いの国民性の特徴をどうみているのかについて、書物を中心に探り、特に、日本人側で自己中心的な見方による韓国人観がいまだに影響していると指摘する。このことは、歴史記述とも深い関係がある。

明治維新後、日本政府が最初に着手した歴史研究が韓国史であり、その背景には「征韓論」があった。それは、植民地支配を正当化する歴史であり、その後の日本人の韓国人観の形成に大きな影響を与えたという。後半では、農業、教育、工業の分野における植民地支配の影響についての分析があり、戦後の韓日の経済関係についても紙面が割かれている。

第七章「歴史教科書—わだかまりの根源」では、前章で扱った歴史記述の歪みについて、具体的な例を挙げる。韓国の高校国史教科書に出てくる日本関係記述では、韓半島から日本列島への文化の一方的な流れ、日本による半島侵略と植民地支配の強調など、ひとりよがりになっている点があり、一方、日本の教科書では、書かれていない日韓の歴史事実が非常に多い点を具体的に指摘する。さらに、日

本の古代史観について、その問題点をとりあげるとともに、神功皇后の新羅征伐、日本の任那支配など、戦後の日本の通説に対しても、韓国側の資料に典拠して鋭い反駁を加える。著者によれば、日本側の韓国に関する記述は、少数の例外を除いて、韓民族が終始一貫、日本の海外進出の対象となるべく、主体性のない弱い民族だという固定観念を植えて付けるような記述であるという。

第八章「日韓双方の最近の変化を読む」では、韓日両国の最近の変化が描かれる。韓国では、資本主義の発達に伴って社会的分業と階層化が進み、価値が多元化し、若い世代の間では、個人主義的な合理主義的思考が発達した。しかし、一方で強権的秩序に対する反発、軍隊的画一思想の影響、労働問題、知識偏重等、合理主義の弊害があらわれ、反省の機運があらわれ始めている。著者によれば、韓国は今こそ、独立後四〇年間の総反省をなすべき時期に来ているという。

## 図書紹介

日本においては、自由になった女性と若者、生活と認識における国際化の深まりなどの変化が見られる一方で、政府や企業における「モア・アンド・モア」のモノサシは変わっていないと手厳しい。また、日本人の安心感と忍耐力

の緩みについても警告を発している。さらに、両国をとりまく国際環境の変化としては米ソのぐらつきを概観し、「ごり」の教訓を引き出している。

著者は、日本と韓国がともに、今や広域共同体へと動いてゆく大転換の時期にあり、両国の親善がいやがうえにも強く要請されるときであると見ている。最終章「東アジアの平和と繁栄の条件」は、その親善の助けになると思われるいくつかのポイントを指摘する。

まず、韓国は、発展したといっても、日本と比べるとまだ遅れており、その立ち遅れを前提にして韓国と韓国人を理解してほしいと訴える。また、広域共同体づくりの点でECに学ぶところがあるとする一方で、西洋ひと筋でなく、自らの固有の文化を見直しつつある東洋の社会と人に目を向けて欲しいともいう。富む国が必ずしも好かれる国、信頼される国ではない。日本人は、好かれる国、信頼される国、住みやすい国づくりの方向に心を高めるべきだとも説く。歴史教科書の書き直しが必要であることはいうまでもない。「日韓両国の親善協力の最も有効なキッカケは、自他不二の精神に立った真の道徳心をもつこと、そして『ふれあう』こと」であり、この点に政府の役割が期待される

という。「政府のなすべきことは、こういう道徳心の養成を助けるとともに、今まで我々の意識の中に広く深く歪んだ固定観念を植えつけた歴史記述、歴史教科書を書き直すことだ」と説く。

本書には、大きく見て、二つの問題意識が流れている。

①近代化の早晚を決定づけた文化的要因は何かという問題意識と、②両国の親善を阻む要因は何かという問題意識である。「武」の文化と「文」の文化の「差」という著者の枠組みは、一見、無関係に思えるこの二つの問題意識を見事に結びつけている。いずれも、歴史に根ざした課題であるが、著者は、両国の親善を阻む要因については、特に歴史の見方、それも日本人の側からの日韓の歴史のとらえ方に多くの宿題が残されていると強調する。著者が日韓の「歴史の事実から目をそらさないことの大切さ」を強調するのは、そのためであり、また、両国の親善のために「自他不二」の精神に立つことが不可欠だと説くのも、この「差」を乗り越える必要があるからにほかならない。

本書は、近代化の条件を歴史文化の中から掘り起こそうとしたユニークな日韓比較文化論であるばかりでなく、日韓の新しい歴史の世紀に向かうにあたって、日本人に考え

させられるところの多い警世の書でもある。そして、かつて植民地教育の中に育った著者の文章は、まことに格調が高く、その主張とともに、現代の日本人に歴史と文化と教育の何たるかを深く反省させてくれる。